

## 〈資料紹介〉新城市立八名小学校所蔵の旧岡部（半原）藩藩校資料について

高田 智仁

### はじめに

本稿は、安部家を藩主とした譜代大名・岡部（半原）藩に関する資料について紹介をするものである。

筆者はこれまで同藩における文化面の活動について藩主安部家の事績を中心に幾つか紹介してきた<sup>(1)</sup>が、本稿は藩主から少し離れ岡部（半原）藩藩校関係に焦点を当てたものとなる。

岡部（半原）藩の所領は飛地により形成され、江戸時代を通じて岡部（武蔵）、半原（三河）、桜井谷（摂津）に設けられた陣屋を通じて各地の領地経営にあたっていたことが知られる。三つの陣屋のうち半原陣屋が置かれた三河国八名郡半原（現在の愛知県新城市富岡）が、本稿が取り扱う舞台である。

同地は慶応四年（一八六八）から始まる幕末の政権交代の動乱の最中に岡部陣屋に代わる新たな本拠地選ばれ、以降、藩主ほか主だった藩士が移住し、半原藩としての藩政機能の再構築が順次進められた。程なくした明治四年（一八七一）に廃藩置県を迎えたため、半原藩として活動しえた時期は非常に短い期間となったものの、窮乏する藩財政のなかから藩政整備と並行して学問を修める「学聚館」、武術を修める「健武館」と二つの藩校を設置するなど、藩士育成のための基盤

整備を進めていた。

本稿が報告するのは、同地に設置された藩校「学聚館」に由来する一群の資料となる。現在は愛知県新城市立八名小学校にて保管されているそれら旧藩校資料は古くから各種資料により紹介<sup>(2)</sup>されてきたものの、その全体像については詳らかにされてこなかった。この度、保管先である八名小学校様より許可を得て調査をすることが叶ったため、その概要をここに記しておきたい。

なお、本拠を移した関係で岡部藩と半原藩の名称を併記してきたが、本稿では原則慶応四年以前の事跡については「岡部藩」、それ以後は「半原藩」とし、いずれにも該当する場合には適宜「岡部（半原）藩」と表記する。

### 一 岡部（半原）藩藩校と藩儒について

藩校は、藩が主として藩士やその子弟を対象に藩領内に設置した教育機関を指し、明治四年の廃藩置県までに全国で二百五十を超える藩校が設置されたとも言われている<sup>(3)</sup>。

寛永十八年（一六四一）に備前岡山藩主池田光政が熊沢蕃山に命じて設立した「花島教場」をはじめ、尾張名古屋藩祖である徳川義直が

寛永年間に設置した学問所などが古い事例で、その後、幕藩体制に動揺が生じる近世後期に至ってその数は増え、社会変化に対応した人材の育成を目的に藩校設立が各藩において進められた。

埼玉県下もその例に漏れず、川越、岩槻、忍の各藩、そして岡部藩でそれぞれ藩校が設置されている(4)。

三藩のなかでは藩儒児玉南柯(一七四六—一八三〇)の私塾「遷喬館」を基にした岩槻藩の「勸学所」の設置(文化年間)が早く、忍藩では忍・桑名・白河藩の三方領地替えに伴い文政六年(一八二三)に転封してきた松平下総守家が旧領伊勢桑名藩時代に設立していた「進脩館」を忍城下に再興した(5)。このほか、川越藩では松平大和守家、松平周防守家の両統治時代にそれぞれ藩校を運営している。松平大和守家時代では文政八年(一八二五)に江戸上屋敷地内に「江戸講学所」、同十年に「川越講学所(博諭堂)」が置かれ、慶応二年(一八六六)の前橋移封まで存続した。一方、続く周防守家時代には藩主松平康英の入封後、わずか一年余の期間ではあったが石州浜田藩時代からの藩校であった「長善館」が設置されている。

さて、主題となる岡部藩の藩校についてみていこう。今日、岡部藩校の様相を窺うにあたっては、戦前に編さんされた『日本教育史資料(6)』を基盤として『埼玉県教育史(7)』が更に子細な言及を行っている。両書を紐解きその歴史的経緯を簡単に辿っておくこととしたい(8)。

岡部藩の藩校は江戸藩邸に設置された「就将館」をもって嚆矢とし、同校が衰えた後には同館に代えて「学聚館」が新たに設立された。特に「学聚館」は半原への移転後に同地で再興されており、江戸時代後期から近代初めまでの岡部藩士の教育機関として機能した。

両藩校において教鞭をとった人物としては、藩儒である井上伝右衛門士義(一七三七—歿年不詳)、服部栗斎の門人で儒学・能書で知られた秦貞八(諱は度、字は惟定、号は新村、通称貞八 一七八〇—一八四五(9))、またその息謙次、そして松崎慊堂の門弟宮原成太(諱は煥、字は君章、号は蒼雪、通称成太 一八〇六—一八七六)らの名が挙げられる。

岡部藩が設置した二つの藩校のうち、「就将館」の設置者ならびに時期を巡っては、『新編埼玉県史』が指摘するように大きく二つの説が存在する。

一つは明治時代に編さんされた『日本教育史資料』にみえる半原藩に関する記述「半原藩学校創立云々」で、設立時期は詳らかにはないが安永年間に和学を好んだ安部信亨(一七五八—一八二二)によって設立され、家臣井上俊蔵(前掲伝右衛門士義とみられる)をもって藩儒に据えて藩士教育の充実を図ったとされる(10)。

他方、半原藩士鈴木伝が愛知県に提出した「旧半原藩学校景況(11)」の記述では「天明五乙巳年九月、安部撰津守信允殿学校創立、儒者家臣井上伝右衛門」とされており、『新編埼玉県史』では両資料から鑑みて安永の末から天明の初年頃までに藩校「就将館」が開かれたものと推測している。

『新編埼玉県史』を含め、現在のところ「就将館」は概ね安部信允の時代(天明年間前後)に藩士井上伝右衛門(俊蔵)を儒官に置いて設立されたものとして定着している(12)。

いま、これらに加えて更にその年代を考える手がかりとしうるのは、岡部藩士の事蹟を記した「藩中家譜(13)」における井上伝右衛門こと井

上土義の事蹟であろう。

『埼玉県教育史』では、井上の来歴について一切不明とするが、「藩中家譜」によれば、井上は寛政四年(一七九二)の自身の書上げに「天明五乙巳年九月四日被 召出、当年迄八ヶ年相勤申候」と記しており、天明五年(一七八五)九月に岡部藩家中に列したことが分かる。井上は寛政四年時点で五十六歳、すなわち元文二年(一七三七)の生まれで、天明五年に四十八歳で岡部藩へと出仕した。「藩中家譜」での息子井上真蔵の書上げではその後の寛政十二年(一八〇〇)に父が隠居した旨の記述があることから、岡部藩では天明五年から寛政十二年までの十六年間に渡って藩校にて教鞭を揮ったと思われる(歿年不詳)<sup>(14)</sup>。

家譜内で井上は藩校に係る事績について触れていないが、五十歳手前の人物を儒者として新たに藩に召し抱えていることからして、「就将館」の設置に井上が中心的な役割を担ったものと推察することは誤りではあるまい。

したがって、鈴木伝が作成した「旧半原藩学校景況」が示す「天明五年乙巳年九月」は、時の藩主信亨を信允と誤っているものの藩校設置時期としては依拠できる記述であり、天明五年ないしはそこからしばらくもなく藩校「就将館」開校の運びとなったとみておきたい。

なお、井上土義の隠居に伴い「就将館」はほどなく衰微したとされ『埼玉県教育史』では藩儒秦貞八の墓碑に記された事績から、秦三十五歳の時分(文化十一年・一八一四 信允の孫・信操の時代)に同人によって再興がなされたとする。

一旦は秦の手により復興した「就将館」であったが、弘化二年(一八四五)の秦死没により再び衰微を迎えた。そのため、嘉永二年(一

八四九)に新たに召し抱えられて藩儒となった前掲宮原成太の建言によつて、嘉永年間「就将館」に代わり「学聚館」が設置されることとなった。

「学聚館」は、慶応四年の半原への本拠移転後の混乱期を経て、明治三年(一八七〇)に同地に再興され、総裁宮原成太を筆頭に大助教に大原泰通が任ぜられて指導にあたった。一説によれば、藩士子弟はもとより領民のうち志願者に対しても入学を許可したとする<sup>(15)</sup>。同校は明治四年の廃藩置県により廃されたため極僅かな期間の開校ではあったが、その存在は半原藩の尚学の一面を窺うには十分といえるだろう。

「就将館」でどのような教育がなされていたかについては残念ながら詳らかにならない一方、「学聚館」については半原移転後を中心にその概要が言及されている<sup>(16)</sup>。ここでは重複を避け、本稿が主題に掲げる藩校資料との関連から「学聚館」で使用されたとされるテキスト類に絞って紹介しておくこととする。

「学聚館」蔵書の種類と部数として、『日本教育史資料』では「経類十三部、史類八部、子類一部、集類四部、字書一部」を挙げ、『埼玉県教育史』は更に細分して「孝経、大学、中庸、論語、孟子、易経、詩経、書経、礼記、小学、文選、左氏伝、十八史略、史記、唐詩選」の名を挙げており、四書五経等をはじめとしたテキスト群から明らかかなように、岡部(半原)藩における藩校教育は、当時の常道に則った儒学・漢学に重きを置いたものであった<sup>(17)</sup>。

## 二 八名小学校保管の旧岡部（半原）藩藩校資料

### (一) 八名小学校保管の蔵書群

前項で、岡部（半原）藩藩校の概略について述べてきたが、これら藩校で使用されていた典籍類の一部が現在新城市立八名小学校に保管されていることは冒頭にて述べた通りである。

旧岡部（半原）藩校資料の典籍類を巡り、稿者は同校から許可を頂き、令和四年十一月二日・四日の二日間に渡り調査を実施することができた。ここではその調査結果を基に、八名小学校保管の旧藩校資料の伝存状況の全体像とともにその概要紹介へと歩みを進めていくこととする。

実のところ、八名小学校で保管される蔵書群は旧岡部（半原）藩藩校資料に限られたものではない。旧藩校資料のほか、近代の学制下における「教科書」類も多数現存しており、蔵書全体の時代的な幅で言えば江戸時代後期から明治・大正・昭和の近代までの広がりを持っている。

本稿では特にそれら近現代の教科書類について掘り下げることはしないが、昭和四十九年に刊行された『新城地方教育百年史(18)』によれば、八名小学校は新城地方において明治前期の図書が比較的多く残された学校の一つに数えられており、八名小学校と地域の他の五校の蔵書を俯瞰することで明治五年から十八年頃までの当地における教科書、教授用書がほぼ網羅できるものと位置付けられている(19)。

実際に八名小学校の蔵書群を調査した結果、旧岡部（半原）藩の藩校資料、当地で使用された近代教科書類に加えて、更に別ルートで流入したとみられる典籍・書籍類も確認でき、その総数は二百冊以上に

のぼっていることが判明した(20)。

蔵書群には幾度かの整理の手が入られた痕跡が残されており、近世の典籍類、近代の教科書類問わずその多くに以下三種類の整理符号が付されている【図1参照】。

①朱墨による番号書付

②いろは分類と数字による縦長の貼紙(21)

③三段枠線のラベル(最上段は空欄)

整理の概要については、後掲する旧藩校蔵書のほうで今少し掘り下げを試みるが、いずれも近代の整理によるものとみられ、表紙の状況からみて、まず①朱墨による番号書付(22)、次に②いろは分類の貼紙、そして③三段枠線のラベルの順で手が入られたとみられる。



【図1】「尋常小学修身入門」全

- ・朱筆：修第三十一号
- ・貼紙：「ハ 学校 一」（枠印内）  
「 / 1 4 4 / 1」（枠線内）

近代以後、明治時代前期の目まぐるしく移り変わる学校教育の体制



【図2】「日本外史」十一

- ・朱筆：第十五号
- ・貼紙：「学聚館」  
「へ 学校 第弐号」（枠印内）  
「 / 154 / 7」（枠線内）

や学校組織の変遷等に伴い、時期をみて適宜整理が行われたものとみられ、それぞれの整理時期は不明ながら、その下限としては後掲する現在の八名小学校に至るまでの学校の変遷と捺されている学校蔵書印との関係から明治二十代頃までではないかと推察する。

そうしたなか、いま挙げた近代に入ってから分類整理とは別に、近世、すなわち岡部（半原）藩時代の管理下にあったことを示す痕跡も残されている。それが「学聚館」の墨書貼紙と「就将館」印である（【図2】）。

貼紙「学聚館」は貼付位置や近代以後の整理による貼紙との位置関係からみて、学聚館が明治四年に廃校となる以前に藩校蔵書であることを示すために貼られたものとみなしてよいだろう。

いま、蔵書の中にこれら「学聚館」の貼紙が附されたものを数える

と八十六冊、また「学聚館」以前の藩校であった「就将館」の蔵書を示す朱文楕円印「就将館」<sup>(23)</sup>が押印されたものが七冊現存している。このほかに貼紙の剥落跡が残るものや書名ならびに表紙の様式などから藩校伝来資料と一連のものである可能性が認められるものが更に十五冊ある。



【図2】「就将館」印  
（「文選正文」十一）表紙

これらを合わせると、八名小学校が保管する典籍・書籍資料群のうち岡部（半原）藩伝来と見込まれる資料は総計二十九部一〇八冊を数える。

### （三）旧岡部（半原）藩藩校伝来典籍の概要

旧岡部（半原）藩藩校伝来と思われる一〇八冊の全容は本項末に「八名小学校保管 旧岡部（半原）藩藩校蔵書一覧表（稿）」として掲載するので適宜参照いただくとし、以下、その概要について記しておく。

当然、どの書物も当初はひと揃いであったのであろうが、今日まで

の伝来過程のなかで途中を欠いて端本となっているものが多く、全冊を完備するものは少ない。ただ、一覽表からも分かれるとおり旧岡部(半原)藩藩校伝来典籍群の中身は概ね『埼玉県教育史』等で挙げられてきたものと大差はなく、漢籍が殆どを占める状況にある。

その中身も「論語」「中庸」「孟子」「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」といった四書五経が大半を占めており、その多くは当時広く世に流行した後藤芝山(一七二一—一七八二)による訓点が付された後藤点本ないしはその再刻本になる。このほかに、四書五経以外の漢籍では「十八史略」「文選」「小学」「蒙求」の類がみえている。他方、和書では儒者頼山陽(一七八一—一八三二)が著した「日本外史」の一種類が伝存しているのみであり、伝来過程で散佚したことを勘案しても、岡部(半原)藩藩校における教育が漢籍に基づく儒学的素養を重視したものであったことは疑いようがないだろう。

さて、これら旧藩校資料のなかから刊記が残るものを拾っていくと、最も古いものは京都の書林・中江久四郎が宝暦五年(一七五五)に上梓した「春秋左氏伝」(No. 70) 81 ※No.は一覽表における番号)となり、天明五年頃に始動した藩校「就将館」設立以前のものとなる。

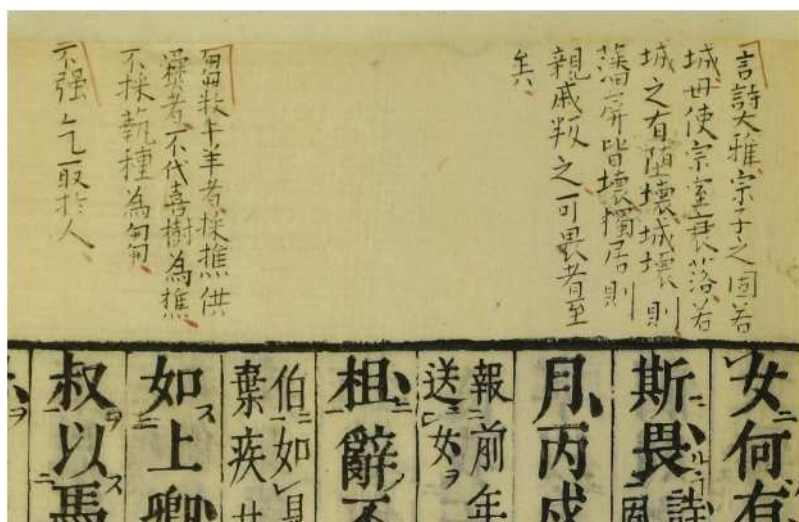
- ・「春秋左氏伝」以降、発刊時期が分かるものを時代順にならべると
- ・「四書」(No. 35) 38) ……寛政五年(一七九三)
- ・「文選正文」(No. 102) 108) ……文政十一年(一八二八)
- ・「再刻春秋左氏伝校本」(No. 56) 69) ……嘉永三年(一八五〇)
- ・「改正音訓礼記」(No. 17) 19) ……安政二年(一八五五)
- ・「標疏箋註蒙求校本」(No. 42) 44) ……安政五年(一八五八)
- ・「新刻改正孟子」(No. 21) 23) ……安政五年

- ・「改正小学」(No. 40) 41) ……文久元年(一八六一)
- ・「標記増補十八史略」(No. 90) 96) ……元治元年(一八六四)
- ・「新刻改正孟子」(No. 28) 30) ……慶応二年(一八六六)
- ・「改正音訓礼記」(No. 6) 8) ……明治二年(一八六九)

現状発行年不明のものについても、他所に残る同種の版本と比較対照することで今少し年代の特定ができれば、いまここに挙げたテキストの発刊年を概観するだけでも岡部(半原)藩藩校の整備が幕末期になされていた様相が窺える。秦貞八の歿後、新たに藩儒となった宮原成太が「学聚館」を立ち上げたのが嘉永年間とされていることから、同校の立ち上げを契機に当時発刊されていた典籍類を逐次入手しつつ教育体制の充実を図っていたものとみられる。

ここで注目したいのは旧藩校資料内に二部伝存する「改正音訓礼記」である。二部の「改正音訓礼記」(「礼記」以外の五経も含む)の注目すべきは、それぞれ安政と明治とで発行時期を異としているところで、とりわけ明治時代発行分が藩校蔵書に加えられているのは興味深い。先に述べた通り「学聚館」は慶応四年に本拠を半原に移転して以後の明治三年に再興を遂げていることから、恐らくこの明治二年発行の「礼記」は藩校再開に合わせて購求されたものと思われる。半原藩が明治の新时代を迎えてもなお教育に意を割かんとしたことを示す資料と言つてよいのではないだろうか。

旧藩校資料の全体像とともに、岡部(半原)藩士たちが学聚館において如何にこれらの書物を活用したのかについても見ていきたいところだが、現存する資料からその様相を追うことは困難な状況にある。



【図3】「春秋左氏伝」巻二十一(部分)

これは伝存する資料の殆どに訓点や訓読、注釈といった書き入れなどが殆ど残されていないため、蔵書群のなかで唯一の書き込みを有するテキストといつてもよいのは、先に挙げた「春秋左氏伝」(No. 71) 82) だけである。こちらには本文中に朱点等が加えられているほか、匡郭外に語釈、音・反切を示す注釈類が多数記載されている【図3】。前述のとおり、このほかに多数残る蔵書には当時の痕跡は認めがたく、藩士たちがどのように古典に相対したのかを読み取ることは残念ながら難しい(24)。

以上、調査の過程で判じ得た旧藩校資料の概要となるが、本項で一覽表を掲げたこともあるので多少前後したが表紙に残された3つの整理番号(前項①③)について改めて触れておこう。

いま、表で一覽化したところから分かるように、3つの整理番号はいずれも原則書名を基準にそれぞれ数字を割り振ったものであることが了解される。ただ、細かいところでは相違があり、例えば

No. 1~19の「改正音訓五経」を構成する書冊を例にとると、①朱墨による番号書付では、明治発行分に「第一号」、安政発行分に「第二号」を割り当て区別をしている。また、ここでは個々の書名ではなく五経全体をひとまとめとした番号付けがなされている。

一方、三段枠線のラベルに関しては、表紙をめくった一頁目に三段枠線と対応する枠印を別途捺しているものがあり、これが参考となる。別に捺された枠印には上段に「部門」、中段「図書番号」、下段「巻冊番号」の印字がそれぞれみられ、中・下段に記入された数字は表紙のラベル数字と対応している。このことから表紙に貼られた三段枠線ラベルの意味するところは、中段が書名毎にナンバリングされた図書番号で、複数冊で構成される資料については下段に冊番号(子番号)を記入して整理したものとみられる(25)。

最後に、②いろは分類と数字による縦長の貼紙だが、こちらも概ね書名に拠ったであろうことが窺えるものの、前掲の「改正音訓五経」に対しては発行年、書冊名に問わず「ほ 学校 二号」を割り当てているほか、「本註小学」(No. 39)には「四書」(No. 35~38)と同一の「へ 学校 第四号」を振っている事例がみられるなど、貼紙に記された「いろは」が何を基にした分類なのかを含め、その正確な規則性に言及することは叶わない。

いずれとも書名に拠った分類と思しき一方、当てはまらないものもまま見られることに加えて、旧藩校資料以外の蔵書、近代教科書群と合わせて蔵書群全体で捉えると、整理符号の数字・記号には重複するものがこのほかにも散見する。当時の整理方法については本稿では止む無く大概を示すにとどめて、子細は今後の研究を俟ちたいと思う。

【八名小学校保管 旧岡部(半原)藩藩校蔵書一覧表(稿)】

書名	巻名	注記	表紙貼紙	朱書	表紙貼紙(いろは)	表紙貼紙[神印]	表紙	印記①	印記②
改正音訓詩経	上	再刻後藤点	学聚館	第一号	なし	空白	8	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓詩経	下	再刻後藤点	学聚館	第一号	なし	空白	8	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓易经	坤	再刻後藤点	学聚館	第一号	なし	空白	17	3	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓易经	乾	再刻後藤点 見返: 柴山後藤先生定本、林家正本 再刻序: 文化九年壬辰九月 江都佐藤且撰	学聚館	第一号	なし	空白	17	4	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校 見返: 讃岐儒学藩氏図書 見返: 清熟齋
改正音訓春秋	完	再刻後藤点	学聚館	第一号	なし	空白	21	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓礼記	元	再刻後藤点	学聚館	第一号	ほ 学校 第二号	空白	23	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校 第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓礼記	利	再刻後藤点	学聚館	第一号	なし	空白	23	3	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓礼記	貞	再刻後藤点 刊記: 明治二已年再刻	学聚館	第一号	なし	空白	23	4	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校 奥付: 松敬堂蔵
改正音訓礼記	元	再刻後藤点	学聚館	第一号	なし	空白	24	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓詩経	上	再刻後藤点	学聚館	第二号	なし	空白	9	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓詩経	下	再刻後藤点	学聚館	第二号	なし	空白	9	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓易经	天	再刻後藤点	学聚館	第二号	なし	空白	10	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓易经	地	再刻後藤点	学聚館	第二号	なし	空白	10	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓易经	乾	再刻後藤点 見返: 柴山後藤先生定本、林家正本 再刻序: 文化九年壬辰九月 江都佐藤且撰	学聚館	第二号	なし	空白	17	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓易经	坤	再刻後藤点	学聚館	第二号	なし	空白	17	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓春秋	完	再刻後藤点	学聚館	第二号	ほ 学校 第二号	空白	22	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓礼記	亨	再刻後藤点	学聚館	第二号	ほ 学校 第二号	空白	24	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校 第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓礼記	利	再刻後藤点	学聚館	第二号	なし	空白	24	3	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正音訓礼記	貞	再刻後藤点 刊記: 安政二年乙卯四月吉日五刻 書録: 北村四郎兵衛ほか3名	学聚館	第二号	ほ 学校 第二号	空白	24	4	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
[新刻改正孟子]	(題簽文)		金学聚館	第四号	なし	空白	12	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
新刻改正孟子	一	再刻後藤点	正学聚館	第四号	なし	空白	13	1	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
新刻改正孟子	三	再刻後藤点	学聚館	第四号	なし	空白	13	2	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
新刻改正孟子	四	再刻後藤点 刊記: 安政五年戊午春正月六刻 書録: 北村四郎兵衛ほか3名	学聚館	第四号	なし	空白	13	3	第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
新刻改正論語	三	再刻後藤点	学聚館	第四号	なし	空白	14	3	なし
新刻改正論語	四	再刻後藤点	学聚館	第四号	なし	空白	14	4	なし
新刻改正論語	二	再刻後藤点	学聚館	第四号	なし	空白	15	1	なし
新刻改正中庸	■	再刻後藤点	学聚館	第四号	なし	空白	18	1	なし
新刻改正孟子	一	後藤点	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	12	1	なし
新刻校正孟子	三	後藤点	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	12	3	なし
新刻改正孟子	四	後藤点 刊記: 寛政丙寅歳新刻 書録: 和泉屋次郎ほか2名	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	12	4	なし
新刻改正論語	一	後藤点	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	14	1	なし
新刻改正論語	二	後藤点 裏見返: 学聚館の墨書あり	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	14	2	なし
新刻改正論語	三	後藤点	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	15	2	なし
新刻校正中庸	全	後藤点	※藩校資料か	第五号	に 学校 第四号	空白	19	1	なし
四書	一		学聚館	第七号	へ 学校 第四号	空白	40	1	薄茶表紙
四書	二		学聚館	第七号	へ 学校 第四号	空白	40	2	薄茶表紙
四書	三		学聚館	第七号	へ 学校 第四号	空白	40	3	薄茶表紙
四書	四		学聚館	第七号	へ 学校 第四号	空白	40	4	薄茶表紙
本註小学	内篇	見返: 須賀亮常先生親定、肥後書院蔵	学聚館	第八号	へ 学校 第四号	空白	11	1	誦脂表紙 第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校 見返: 人物画像印
改正小学 内篇	亨	刊記: 文久辛酉新撰 書録: 須賀亮常先生親定ほか7名	学聚館	第九号	ほ 学校 第三号	空白	20	1	誦脂表紙(花草丸文) 第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
改正小学 外篇	利		学聚館	第九号	ほ 学校 第三号	空白	20	3	誦脂表紙(花草丸文) 第二大区第九番中学校内第三十二番小学半原学校
標識箋註蒙求校本	上		学聚館	第十号	へ 学校 第三号	空白	46	1	黒表紙
標識箋註蒙求校本	中		学聚館	第十号	へ 学校 第三号	空白	46	2	黒表紙
標識箋註蒙求校本	下	刊記: 安政五戊午歳四刻	学聚館	第十号	へ 学校 第三号	空白	46	3	黒表紙
校正音訓新刻文選正文	一		学聚館	第十一号	なし	空白	34	1	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	二		学聚館	第十一号	なし	空白	34	2	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	三		学聚館	第十一号	なし	空白	34	3	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	四		学聚館	第十一号	なし	空白	34	4	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	五		学聚館	第十一号	なし	空白	34	5	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	六		学聚館	第十一号	なし	空白	34	6	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	七		学聚館	第十一号	なし	空白	34	7	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	八		学聚館	第十一号	なし	空白	34	8	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	九		学聚館	第十一号	なし	空白	34	9	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	十		学聚館	第十一号	なし	空白	34	10	紺紙表紙
校正音訓新刻文選正文	十一		学聚館	第十一号	なし	空白	34	11	紺紙表紙



(資料紹介) 新城市立八名小学校所蔵の旧岡部(半原)藩藩校資料について(高田)

書名	巻名	注記	注記	表紙貼紙	朱書	表紙貼紙[いろは]	表紙貼紙[押印]	表紙	印記①	印記②
56	再刻春秋左氏伝校本	一・二	見返: 嘉永三年庚戌再刻、尾張泰彌先生校読	学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	1 誦脂表紙	なし
57	再刻春秋左氏伝校本	三・四		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	2 茶表紙	なし
58	再刻春秋左氏伝校本	五・六		学聚館	なし	ほ 学校 第四号	空白	2	3 誦脂表紙	なし
59	再刻春秋左氏伝校本	七・八		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	4 誦脂表紙	なし
60	再刻春秋左氏伝校本	九・十		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	5 誦脂表紙	なし
61	再刻春秋左氏伝校本	十一・十二		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	6 誦脂表紙	なし
62	再刻春秋左氏伝校本	十三・十四		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	7 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
63	再刻春秋左氏伝校本	十五・十六		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	8 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
64	再刻春秋左氏伝校本	十七・十八		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	9 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
65	再刻春秋左氏伝校本	二一・二二		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	10 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
66	再刻春秋左氏伝校本	二三・二四		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	11 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
67	再刻春秋左氏伝校本	二五・二六		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	12 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
68	再刻春秋左氏伝校本	二七・二八		学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	13 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
69	再刻春秋左氏伝校本	二九・三十	刊記: 発行書房 須原屋茂兵衛ほか6名	学聚館	第十三号	ほ 学校 第四号	空白	2	14 誦脂表紙	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
70	春秋左氏伝	[一・二]		学聚館	第十四号	なし	空白	1	1 澁紙表紙(石畳地)	見返: 南山寺
71	春秋左氏伝	三・四		学聚館	第十四号	なし	空白	1	2 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
72	春秋左氏伝	七・八		学聚館	第十四号	なし	空白	1	4 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
73	春秋左氏伝	十一・十二		学聚館	第十四号	なし	空白	1	5 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
74	春秋左氏伝	十三・十四		学聚館	第十四号	なし	空白	1	6 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
75	春秋左氏伝	十五・十六		学聚館	第十四号	なし	空白	1	7 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
76	春秋左氏伝	十九・二十		学聚館	第十四号	なし	空白	1	8 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
77	春秋左氏伝	二一・二二		学聚館	第十四号	なし	空白	1	9 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
78	春秋左氏伝	二三・二四		学聚館	第十四号	なし	空白	1	10 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
79	春秋左氏伝	二五・二六		学聚館	第十四号	なし	空白	1	11 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
80	春秋左氏伝	二七・二八		学聚館	第十四号	なし	空白	1	12 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
81	春秋左氏伝	二九・三十	刊記: 宝暦五乙亥歳正月之吉、書林中江久四郎持	学聚館	第十四号	なし	空白	1	13 澁紙表紙(石畳地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
82	日本外史	五		学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	1 薄綴表紙(紗綾地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
83	日本外史	六		学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	2 薄綴表紙(紗綾地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
84	日本外史	七		学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	3 薄綴表紙(紗綾地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
85	日本外史	八		学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	4 薄綴表紙(紗綾地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
86	日本外史	■	頼氏蔵板	学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	5 薄綴表紙(紗綾地)	なし
87	日本外史	十		学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	6 薄綴表紙(紗綾地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
88	日本外史	十一		学聚館	第十五号	へ 学校 第二号	空白	154	7 薄綴表紙(紗綾地)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
89	[日本外史]	(表紙欠)		※薄綴資料か	(不明)	(不明)	(不明)		薄綴表紙(紗綾地)	なし
90	標記増補十八史略	一	(題簽跡あり) ※薄綴資料か	※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	3	1 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
91	標記増補十八史略	二		※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	3	2 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
92	標記増補十八史略	三	(題簽跡あり) ※薄綴資料か	※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	3	3 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
93	標記増補十八史略	四		学聚館	第十九号	なし	空白	3	4 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
94	標記増補十八史略	五	(題簽跡あり) ※薄綴資料か	※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	3	5 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
95	標記増補十八史略	六		学聚館	第十九号	なし	空白	3	6 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
96	標記増補十八史略	七	刊記: 元治元年甲子四刻成書録・岡田屋義七郎ほか3名	(題簽跡あり) ※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	3	7 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
97	標記増補十八史略	二		学聚館	第十九号	なし	空白	4	1 薄綴表紙(松皮表文)	愛知県八名郡富岡村立富岡尋常小童
98	標記増補十八史略	三		学聚館	第十九号	なし	空白	4	2 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
99	標記増補十八史略	四		※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	4	3 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
100	標記増補十八史略	五		学聚館	第十九号	なし	空白	4	4 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
101	標記増補十八史略	六	(題簽跡あり) ※薄綴資料か	※薄綴資料か	第十九号	なし	空白	4	5 薄綴表紙(松皮表文)	第二大区第九番中校区内第三十二番小学半原学校
102	[文選正文]	(題簽跡あり)	見返: 兼山先生訓点/筑水先生校閱、再刻、京師書賣屋月堂	就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	1 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館
103	文選正文	一	内題: 南郭先生句読、兼山先生園談	就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	2 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館
104	文選正文	四		就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	4 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館
105	文選正文	七		就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	6 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館
106	文選正文	十		就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	7 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館
107	文選正文	十一		就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	8 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館
108	文選正文	十二	刊記: 文政十一年戊子再刻、京師書賣屋月堂左衛門	就得館(印)	第二十一号	に 学校 第三号	空白	33	9 薄綴表紙(表地に桐葉唐草文)	就得館

【注記】

- ・書名は、原則外題題簽から採った。題簽等が無いものについては、内題ほかから補い、[ ]で示した。
- ・本表では、朱墨における分類番号ならびに三段ラベルの分類番号(色塗部)を基準に配列を行っている。

(三) 蔵書群に捺された所蔵印からみえる伝来過程

前項までに概要を示した八名小学校保管の旧岡部(半原)藩藩校資料について、本稿ではこれら資料に捺された学校所蔵印を紹介しつつ、明治時代以後に旧藩校資料が辿った変遷について示すこととしたい。

管見の範囲ながら、旧藩校資料群には岡部藩時代の「就将館」印のほかにも二種類の学校蔵書印が確認できる(個別に捺された極少数の印は除く)。一つは「第二大学区第九番中学区内第三十二番小学半原学校」印、いま一つは「愛知県八名郡富岡村立富岡尋常小黌」で、いずれも朱文印である。数量的には前者が圧倒的に多く、計一〇八冊のうち六十八冊(七十一か所)に捺されており、後者は五冊(五か所)に確認ができる。

この両蔵書印の子細については、保管先である八名小学校の歴史と合わせてみるのが近道となる。

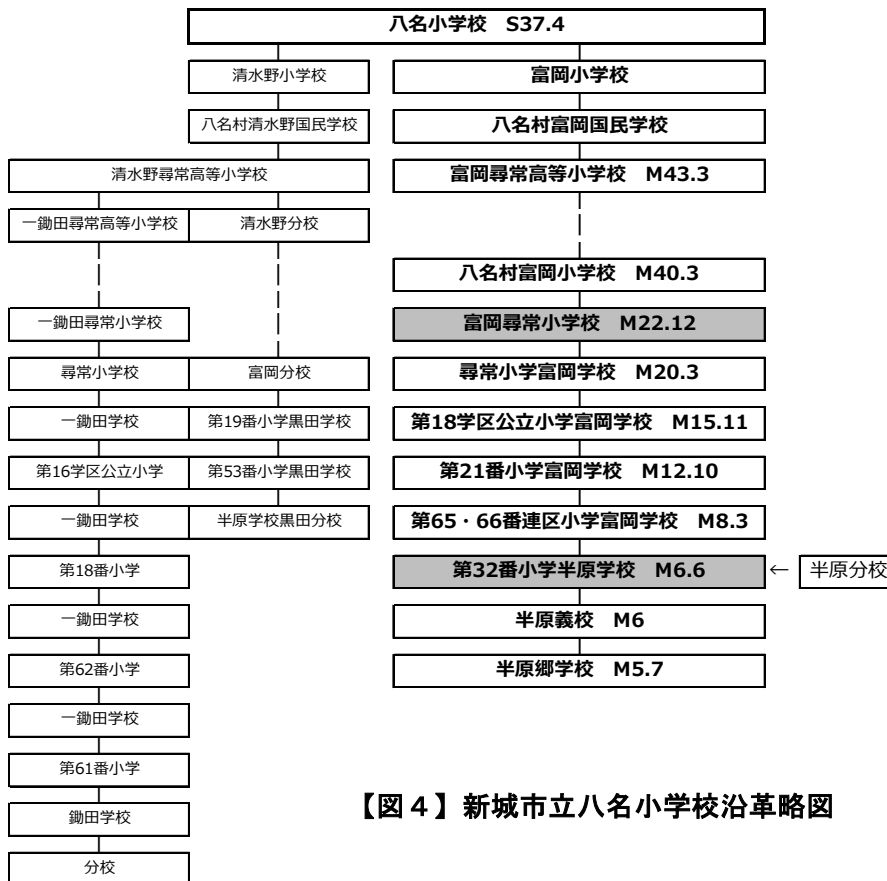
八名小学校は新城市富岡に所在する市立小学校で、同地にあつた2つの小学校が合併する形で昭和三十七年に設置された。それ以前、同校に至るまでには多くの変遷を辿っている。

新城市域では、明治四年(一八七二)七月の廃藩置県後、各地で地元有志らにより従来の寺小屋に代わる教育機関として「郷学校(郷校)」(のち「義学校(義校)」、設立の動きが盛んになった。そうした流れの中で半原の地にも「半原郷学校」(のち「半原義校」)が明治五年七月に設立された。

明治五年八月に文部省布達によって学制が公布されるにともない大中小学区が制定されると、明治六年、洞雲寺(26)に「半原学校」が設置され、同校は当時の区割りでは第九中学区第三十二番小学区に所属し

た。以後、明治十二年の学制廃止、教育令公布、同十三年の改正教育令、同十九年に公布された小学校令など教育関係法令の変遷に伴い、区割りおよび校名が随時変更されていった。

そうした八名小学校以前の沿革については『新城市誌(27)』に詳しく、同書を基にその変遷を図示したものを左に掲げる【図4】。



【図4】新城市立八名小学校沿革略図

図にて色塗りをした学校が旧藩校資料に確認できる二つの蔵書印の使用方で、「第二大学区第九番中学区第三十二番小学半原学校」印は明治六年六月に洞雲寺に設置された半原学校、「愛知県八名郡富岡村立富岡尋常小贗」印が明治二十二年に尋常小学富岡学校から改称して成立した富岡尋常小学校にそれぞれ該当する(28)。

学制が立ちあがった明治初期では、「小学読本」など欧米の書物を翻訳したものや既存の一般図書から推薦されたものが教科書として使用された一方、小学校に先駆けて設立された郷学校では、寺子屋や藩校などで用いられた漢籍資料も使用されていたことが指摘(29)され、また、この地域ではその後、少なくとも明治八年頃までそれらが継続して使用されていた状況にあったとされている(30)。

このことからみて、明治六年に開校した半原学校にあっても一時期ながら旧藩校資料群も教科書として児童らの学習に供されていた可能性は高く(31)、現存する旧藩校資料の多くに半原学校の所蔵印が捺されているのは当時のそうした状況の証左ともいえるのではなからうか。

そうしたなか、明治十九年の小学校令の施行により検定教科書制度が開始され、小学校の教科書は文部省の検定を経たもののみが府県で採択されるようになった(32)。そのため、小学校における教科書制度が確立する最中にあつた尋常小学校富岡学校時代に旧藩校資料を実際の現場で用いていたとは考えにくい。それでも学校(富岡尋常小学校)の蔵書印を押印していたということは、時代が移り使用されなくなつたとしても当地の教育の一端を示すものとして、あるいは代々学校に伝わってきた貴重な資料と位置付け、学校内で責任を持って管理保管する旨を明示しようとしたものであろうか。

ただ、両蔵書印ともに押印された冊とされていない冊が生じており、半原学校の蔵書印にしてもNo. 82～89の「日本外史」など一具であるはずのものでも巻により押印の有無が存在しており、全体で見ても現存する旧藩校資料の六割強への押印に止まっている。また富岡尋常小学校の蔵書印も同校に多数伝来・保管されていたであろう旧藩校蔵書のなかから、なぜ「標記増補十八史略」(No. 90～96、No. 97～101)の5冊に絞って押印をしたのか、その理由は現状明確にはしえない。

ともあれ、とりわけ半原学校の蔵書印については、旧藩校資料が明治時代に入っても当時の学校現場において利活用されてきたことを示す痕跡として本稿では位置づけておきたい。

さて、旧藩校資料に捺された学校の蔵書印を中心に扱ってきたが、関連して八名小学校に保管される旧藩校資料以外の典籍・書籍類にも裾野を広げ、それらに確認できた蔵書印についてもこの機に紹介しておこう。

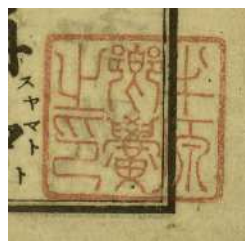
調査の過程では、半原学校、富岡尋常小学校の蔵書印以外には次に掲げた7種類がみられ、都合全9種類の蔵書印を確認しうる。

- ・「半原郷贗之印」
- ・「第二大学区内第九番中学区第三十二番小学半原学校印」(33)
- ・「第二大学区第九中学校区内第六十五番小学  
第六十六番小学聯区富岡学校印」
- ・「愛知県八名郡二十一番小学富岡学校印」
- ・「八名郡富岡学校蔵書」
- ・「愛知県三河国八名郡富岡学校」
- ・「愛知県八名郡尋常小学富岡学校之印」

(学校成立順 いずれも朱文印)

【八名小学校保管典籍・書籍蔵書印一覽】

※縮尺は一定ではない



①半原郷覺之印



④第二大學區第九中學校区内  
第六十五番小学 第六十六番小学 聯区富岡學校印



⑦八名郡富岡學校蔵書



②第二大學區第九番中學校区内  
第三十二番小学半原學校



⑤愛知縣八名郡二十一番  
小学富岡學校印



⑧愛知縣八名郡尋常小学  
富岡學校之印



③第二大學區内第九番中學校  
第三十二番小学半原學校印



⑥愛知縣三河國八名郡富岡學校



⑨愛知縣八名郡富岡村立  
富岡尋常小覺

「富岡學校」の印文を有する蔵書印が複数あり、いずれの時期のもの

②と⑨は旧藩校資料に押印が確認できる蔵書印

のか特定し難いところもあるが、【図4】新城市立八名小学校沿革略図と対照してもらえれば分かるように、これらは半原郷学校（明治五年設立）から富岡尋常小学校（明治二十年設立）まで、八名小学校の前身となった二つの小学校のうちの富岡小学校に至る歴代学校の用印であることは間違いない<sup>(34)</sup>。

全9種にも及ぶ蔵書印のうち、前掲のとおり旧藩校資料に捺されていた蔵書が②と⑨の半原学校と富岡尋常小学校のものに限定されていることからすれば、やはり旧藩校資料は②の所蔵印が使用された半原学校時代に活用されていた可能性が高いのではないだろうか。

なお、調査過程では清水野小学校に連なる各学校の用印は見いだせておらず、確認し得た蔵書印からは、八名小学校保管の典籍・書籍の蔵書群が富岡小学校系列の歴代学校で使用ならびに保管されてきた資料を基盤としたものであることが窺い知れる。

結びに代えて

本稿では、埼玉県における岡部藩研究においてこれまで概要が知られるに止まってきた、新城市立八名小学校にて保管される旧岡部（半原）藩藩校資料について調査ならびに紹介を行った。

概ねこれまでに紹介されてきたところから相違はなく、旧藩校資料蔵書類の中身については四書五経ら漢籍によって構成されており、岡部（半原）藩藩校における教育が儒学を基にしたものであるという結論に変わりはない。また、蔵書群には手跡等活用の跡がほとんどなかったため、往時における藩士教育の様相がどのようなものであったかにまで踏み込めなかったが、本稿で明らかとした蔵書群の全容が岡部

（半原）藩研究の基礎的史料として今後活用されることになれば幸いです。

このほか、何分詳らかにしえた部分が少なかつた一方で、今回の調査では半原の地における半原藩校「学聚館」ならびにその蔵書群が地元教育において果たした役割の一端を垣間見ることとなった。

戦前に刊行された『八名郡誌』における「学聚館」の評価では、本拠移転から程なくして廃藩により廃校になったことから地元に裨益するところがなかつたとの厳しい評価<sup>(35)</sup>がなされている。その一方、調査を行ったところでは蔵書に捺された半原学校の蔵書印をはじめ、その蔵書群が短い期間ではあるものの当地で活用されていた様相が窺えた。

本文中では触れなかつたが、旧藩校資料を含め八名小学校保管の蔵書群には、調査カードとともに、学校名や資料名などが記された簡単なキャプションがついているものがある。これらについて、本稿でも度々参照した『新城地方教育百年史』との関係について触れて終えることとした。

同著は、明治五年の学制発布から百年を迎えたことを記念して編さんされたもので、編さんにあたり編集委員によって地元各学校が所蔵する学校所蔵資料の悉皆調査が行われている。現在八名小学校に残る調査カードの最上部にみえる「教育百年史資料調査カード」のタイトルが示す通り、これらのカードは同著の編さん時の調査に際して作製されたものである<sup>(36)</sup>。また、刊行と合わせて各種記念事業も催されており、その一つに資料展「目で見る教育100年」が新城中学校講堂を舞台に開催されている<sup>(37)</sup>。具体的に何が展示されたのかまでは不

分明だが、八名小学校の蔵書資料内に時折みられたキャプションは恐らくこの時の展示への出品に合わせて作成されたものとみられる。

旧藩校資料の中にもこのキャプションが付属しているものがあり、半原でわずかに数年しか活動できなかった「学聚館」もまた当地における教育の様相を伝える貴重な資料として展示に供されていた。

旧半原藩校が直接的に果たした役割は確かに些少なものであったのかもしれないが、その後の展開も含めて捉えた時、当地教育における旧藩校資料のもつ意義についてはより俯瞰的な視点から検討する必要がある。

今回の調査では単身計2日間という極短期間での実施となつたため、八名小学校保管の蔵書群のうち近代教科書群を含めた子細にまでは及ぶことができなかった。今後、改めてその全体像が明らかにされることが切に望まれる。

#### 【謝辞】

本稿を成すにあたり、八名小学校保管の蔵書群の調査を巡って、八名小学校校長 河部 拓様、同校教頭（当時） 林 祐子様から格段の御高配を賜りました。この場を借りて深謝いたします。また、迎え入れていただきました同校の皆様にも御礼申し上げます。

#### 【付記】

本研究は JSPS 科研費奨励研究（課題番号 22H04011）の助成を受けて行ったものです。

## 註

- (1) 拙稿「文書館資料にみる岡部藩主安部家の文化交流の一断面―長島藩・空々琴社との交流」(『文書館紀要』三十三号 埼玉県立文書館、二〇二〇年)、「岡部藩主安部家と異国文化を巡って」(同三十四号、二〇二一年) 参照。
- (2) 『埼玉県教育史』第2巻(埼玉県教育委員会、一九六九年)、「新城市誌」歴史篇・現状篇(新城市誌編集委員会、一九八七年)等により紹介される。『埼玉県教育史』口絵で八名小学校所蔵の「文選正文」に捺された「就将館蔵書印」が掲載される。
- (3) 諸説あるが、『埼玉近世史話』(埼玉近代史研究会、一九七八年)では二五二校とする。
- (4) 県内諸藩の動向については、大村進「幕末維新期における藩学の近代化について―埼玉県内諸藩の場合―」(『信濃』二六五号 信濃史学会、一九七二年)、『新編埼玉県史』通史編4近世2(一九八九年)、大石学編『近世藩制藩校大事典』(吉川弘文館、二〇〇六年) 参照。
- (5) 天保七年(一八三六)に講堂建設。運営に当たっては文政九年に藩儒として招かれた芳川波山(一七九四―一八四六)が大きな役割を果たしている。凶録『忍藩士の文化』(行田市郷土博物館、二〇一四年) 参照。
- (6) 『日本教育史資料』第一冊巻三「東山道」旧半原藩(文部省総務局、一八九〇年)、同 第四冊巻十「尾参両国旧各藩 愛知県取調」半原藩学校創立云々、ならびに巻十一「学士小伝」旧半原藩秦貞八(文部省総務局、一八九一年) 参照。
- (7) 前註2 参照。
- (8) このほか、埼玉県(岡部)側では前註4で掲げた『新編埼玉県史』通史編4近世2がある。加えて愛知県(半原)側では、『八名郡誌』(国書刊行会、一九八七年 ※原著は一九二六年刊行)のほか、前註2『新城市誌』がある。また、本文中でも紹介する『新城地方教育百年史』(新城地方教育事務協議会、一九七四年)も詳しい。愛知県側資料では半原に移ってからの「学聚館」の動向を中心に記す。
- (9) 秦貞八の事績については前註6『日本教育史資料』第四冊の「学士小伝」、『埼玉県教育史』が詳しい。このほか、岡部陣屋にて藩士教育に従事したとみられる人物に岩井慎(号松嶺、通称又兵衛・又助)がいる。
- (10) 前註6『日本教育史資料』第四冊巻十「尾参両国旧各藩 愛知県取調」半原藩学校創立云々 参照。なお、安永年間の藩主は安部信亨の父信允。
- (11) 全文は、鈴木宇良安「半原藩の教育と其事蹟」(『愛知教育』第五五七号)、『尾三文化史談』第六輯 愛知県教育会、一九三四年)が掲載する。明治十八年三月に旧半原藩士鈴木伝が第七組戸長中島隆屋に対して提出したもので、同文書では、天明五年に信允により就将館開校、文化八年の信操時代を「学事進歩大」(儒者・秦貞八、岩井又兵衛)とし、天保十三年の信古時代は「学事衰微」(儒者・宮原成太)と述べたのち、時代信宝から信発時代について「学事稍進歩に至れり」と振り返っている。
- (12) 大石学編『近世藩制藩校大事典』(吉川弘文館、二〇〇六年)等もこの説を踏襲する。
- (13) 埼玉県立文書館収蔵「池田氏収集岡部藩安部家文書」No.1110。「藩中家譜」の詳細については拙稿「岡部藩家老菊池家と菊池武昭について―「藩中家譜」の事績書上げに着目して―」(『文書館紀要』第36号 埼玉県立文書館、二〇二三年)を参照されたい。
- (14) 井上の岡部藩内での待遇は、一貫して「御近習格・御儒者」で高十人扶持となっている。
- (15) 前註6『日本教育資料』第一冊巻三「東山道」旧半原藩では「平民ノ子弟教育方法 農民等ノ子弟ト雖モ就学志願ノ者ヲハ藩立学校へ入学スルコトヲ許可スルモノトス」とある。
- (16) 前註6『日本教育史資料』第一冊巻三「東山道」旧半原藩参照。
- (17) 特に明治時代に入ってから「学聚館」の教育方針については、学館総裁となった宮原成太の記した「七月晦着神祇官御下問及見込書」とする長文の手控えに詳しい。それによれば、儒学教育を通して藩中の貴賤上下老少に至るまで新政府の標榜する政教一致の趣旨を徹底し、天下一心に帰することが最良とされている(『新城地方教育百年史』新城地方教育

事務協議会、一九七四年)。なお、同見込書全文は、前註11の鈴木氏論考にて見ることが出来る。同氏は見込書の記された時期を明治三年と推測する。

(18) 新城地方教育事務協議会、一九七四年

(19) 前註18『新城地方教育百年史』では八名小学校保管の教科書類として、「小学読本」をはじめ「単語篇」「小学修身訓」「世界国尽」「万国地誌略」「小学算術書」「日本略史」など計五十一種類の多岐に渡る資料を掲げている。

(20) 蔵書群全冊を完全に整理はできなかつたため概数に留めておく。

近代の学校教科書類・旧藩校資料以外にも表紙・裏表紙に「鳳林寺」「法花院」「鳳峰法花院求之」などの墨書が記された典籍が確認された。墨書にみえる寺号は、八名小学校と同じ新城市内に所在する古刹煙巖山鳳来寺の僧房の一つであった法華院を指すものと思われる。八名小学校で同院が所持していた典籍類を保管することとなった経緯、時期とも不明であるが、法華院は明治八年に鳳来寺を含め一帯全てを灰燼に帰した大火で失われていることから、それより以前、恐らくは明治に入つて寺領経営に支障をきたすなかで、当時地元で設立が進められた郷学校等での活用を企図して受入されたものであろうか。(参考:『鳳来寺山の歴史 寺と戦国武将』長篠戦史資料編7 鳳来町立長篠城趾史跡保存館、一九八三年)

(21) 「学校」は蔵書の所蔵先が学校であることを示すものか、八名小学校蔵書ではこれ以外の表記は見当たらない。貼紙には枠線が引かれており、類似の形式で「いろは」分類、「学校」、「第何号」が記されたタイプのものもある。

(22) 朱墨に先駆け、一部に墨書で番号が附されたものも存在する。蔵書群内に残る明治二十年に発行された「尋常小学作文書」「尋常小学珠算全書」「小学理科書」の三種の教科書の表紙には墨書でそれぞれ「乙第一号」「乙第十九号」「乙第十三号」とあるが、それとは別に朱墨により「改第十二号」「改第十九号」「改第二十二号」とする分類番号が加えられている。

「改」字から、墨書の乙番号から改められたことを示すものと思われるが、当初の墨書が何に基づいた番号だったかは不明。

(23) タテ五・四 c m × ヨコ三・八 c m。本印は、現在埼玉県立文書館が収蔵する「安部家(岡部藩主)文書」No.209「印譜 全」に所収される「就将館」印と相違ない。これまで殆ど研究の俎上にあがる事がなかった同印譜であるが、「就将館」印のほかに信允以後の歴代藩主の用印が収められており岡部藩主の文事を語るうえで希少な存在である。同印譜については別稿にて改めて紹介したい。

(24) 書き込み以外であれば、本文中に小さくちぎられた桃色の押紙が複数ある。ただ、それらは旧藩校資料以外の近代教科書類にもみられるため、近世当時から近代に入つて一時活用されていた時のものなのか判断がつけられない。そのためここでは紹介に留めておく。

(25) 下段の冊番号は、途中に欠本があつても連番が振られているものがあることから、整理時に現存していた冊数に合わせてナンバリングがなされたものであることが分かる。

(26) 岡部藩初代藩主安部信盛(一五八四—一六七四)により創建。岡部藩で家老を務めた菊池家をはじめ、岡部(半原)藩士の墓所がある。

(27) 前註8『八名郡誌』もあわせて参照。

(28) 富岡村は明治八年に半原村と下宇利村が合併して成立。明治三十九年まで存続した。

(29) 前註8『八名郡誌』がその頃の状況を以下のように述べている。

此の頃の教科書は儒者の塾の真似ことで習字は所謂唐様で片仮名から始め楷書文字を教へた。読本は三字経孝経四書国史略日本外史文章軌範のやうなものをやつた。

(30) 前註18『新城地方教育百年史』では、学制のもとで「小学読本」「地理初歩」「日本誌略」等の教科書が使用されたほかに、当時は「教員の学習経験や郷学校以来の蔵書などによって様々な書物が用いられたと思われる」とする。実際、八名小学校保管の蔵書のうち、「小学算術書」三の裏見返には「半原郷学」印に続けて朱筆にて「第十四大区九中学三十二番半

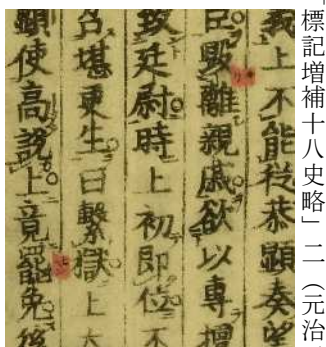
原小学校」と追記するものがあり、郷学校時代のテキストが引き続き使用されたことを示している。



(31) 前註 24 で挙げた桃色の紙片がその痕跡を示す一つであろうか。  
「標註十八史略読本」(明治十五年校正第三刻)



※貼られた紙片の元となった大紙片も冊中に残されている。



※本文中の紙片貼紙と注記

「標記増補十八史略」二(元治元年四刻 旧藩校蔵書 No. 91)

「再刻春秋左氏伝校本」五・六(嘉永三年再刻 旧藩校蔵書 No. 58)



※冊内に残された大紙片

(32) 実際はそれ以前から教科書の制度化は進められており、明治十四年には府県が文部省に届け出る開申制度がとられ、同十六年には文部省からの事前の認可を要するようになった。

(33) 旧藩校資料に押されていた印「第二大学区第九番中学区内第三十二番小学半原学校」とでは「内」「印」の有無などの差異がみえる。第三十二番小学半原学校では、微妙に異なる二種類の印を使用していたこととみられる。

(34) 各印の大きさは以下のとおり(タテ×ヨコ)

- ① 3・7×4・1 cm
- ② 5・0×4・8 cm
- ③ 3・7×3・7 cm
- ④ 5・0×5・0 cm
- ⑤ 4・2×4・2 cm
- ⑥ 3・6×3・6 cm
- ⑦ 3・5×3・5 cm
- ⑧ 5・0×5・0 cm
- ⑨ 4・6×4・6 cm

(35) 前註 8 『八名郡誌』では「家臣の子弟の教養に止り百姓の子弟を収容せず幾くもなく廃藩と共につぶれたこと故郡教育の上には全く影響がなかつた」とし、「学聚館」出身者がその後小学校教員となって当地における教育に寄与したことについては「功績」と評価する。この点については前註 18 『新城地方教育百年史』についても同様の観点に着目し、「半原藩校学聚館が果たした役割は大きい。」との評価を下している。



- (36) 前註18『新城地方教育百年史』によれば原稿作成にあたり、「各学校に依頼して、学校所蔵資料の一覧表と一資料ごとのカードを作製してもらい、これを新城市教委に保存して、調査の基礎資料とした。」とある。
- (37) 前註18『新城地方教育百年史』参照。